

代表からのご挨拶

サンライズ・メイト・バート株式会社

代表取締役 井上 明美



いつも皆様方には、格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

大リーグエンジェルスで活躍する大谷翔平が1918年にベーブ・ルースが達成して以来104年ぶりの「同シーズン2桁勝利、2桁ホームラン」

の偉業を達成したことは皆様もご存じだと思います。日本人としての誇りを忘れずに異国の地での活躍は目覚ましいものです。大谷翔平さんのコメントは「あまり先を見ても仕方ない、まずは明日またいい状態で臨めるようにちゃんと寝ていい明日を迎えられるように頑張りたい」と言い放ったのです。私達も見えない先を余り悲観せず、まず1日1日を大切に生きなければと想いました。寒暖の差が激しくなる秋口お体ご自愛下さい。

サンライズの物語

どんな境遇にあっても——

歳の重ね方について考える物語



その方は両親、ご主人、子供から虐待を受け障がい者となりベット上の生活となった方でした。

そんな境遇にも関わらず何時も明るく「今が一番幸せ。体調は絶好調なのよ」が口癖でした。

自宅から外への外出が困難な間取りだった事から施設への入所も提案されましたが、この場所に居たいとの思いが強く拒否されていたのです。

そんな中突然ヘルパーが朝訪問すると息を引き取っていたのでした。亡くなる前日に私への電話があり「今日は訪問入浴来ないの」との事。予定は明日だと伝えると「勘違いしたのね。ありがとう」・・・その会話が最後でした。

自分が望んでいない環境に生まれ・・・自分の理想とはかけ離れた人との出会いをする・・・悲しいことですね。

年を重ねることは残酷なことです。できないことが増え出会った人達とは別れねばならない。でも、できることも沢山あるのだと考えることが大事なことだと思います。

どんな境遇にあっても今が一番幸せだと言える自分でありたいと考えます。

夏祭り

1週間夏祭りレクを開催しました。ヨーヨー釣り、射的、輪投げを皆さんで楽しまれ懐かしんでおりました。最終日はスイカ割りをしました。おやつにチョコバナナ、かき氷、焼きそば、スイカを召し上がって頂きました。



NEWS 今月のニュース

81歳の現役ホームヘルパー 「若くして死んだ母や妹の分も働きたい」

「元気かね」「待ったった?」。介護が必要な80代の女性宅を訪れ、明るく声をかけた畑岡しのぶさん(81) = 浜田市三隅町井野 = は現役のホームヘルパーだ。「超老老介護」を実践している状態だが、掃除に料理に機敏に動き、利用者からは「娘にしたい」と頼られる。畑岡さんが働き続ける理由には、満州から引き揚げる途中で母と妹2人を失ったつらい戦争体験がある。(板垣敏郎)

満州や苦難の逃避行について当時小学生だった姉は覚えているはずだが、一切語りたがらない。別のところで聞いた母の様子は悲惨だった。

乳飲み子の妹を抱え、でも飢えが厳しく乳が出なかった。「苦しい。子どもたちを連れて帰るのは無理だ。残して誰かに拾ってもらおうや」と言った母を、祖母がしかった。「ばかを言うな。家族はいつも一緒だ」。

思いとどまり連れ帰ろうとしたが衰弱はひどく、母は妹たちと共に力尽きた。27歳だった。

畑岡さんはその後、事務職として働き、27歳を超えた。さらに年を重ね、27をひっくり返した「72」が重要な意味を持つ数字となった。祖母が晩年に世話になったヘルパーの献身的な仕事ぶりに感謝し、自身も60歳でホームヘルパーの資格を取得した。亡き母とのゆかりを感じる「72歳まで続ける」が目標だった。

自ら介護した夫が5年前に亡くなってから独居となったが、仕事は続け、浜田市長沢町のヘルパーステーションを拠点に、毎日のように利用者宅を訪問する。

介護する相手が同年代ということも多く、共に厳しい時代をきたした同志のような気にもなる。「また元気になれるからね」「できることは少しでも自分でやってみよう」。柔らかな口調の中に励ましを込める。

20年来続ける日本舞踊で体を鍛えているが、80代となると体力の衰えを痛感する。仕事後に家で畑仕事をする余力は今はない。でも人と会うのが楽しく、働く意欲は変わらない。

「体が動くうちは、若くして死んだ母や妹たちの分も働きたい」。そんな思いが自らを突き動かす。



利用者の80代女性(右)に体調を尋ねる畑岡しのぶさん = 浜田市内

<山陰中央新報デジタル
2022/8/13(土)>

広報誌「ライジング・サン」のバックナンバーは、弊社ホームページでもご覧いただけます。

ぜひお立ち寄り下さいませ。 <http://www.samaba.jp/back-number/>